

反転する都市

－ 新宿における内的構造の表出 －

Keywords

反転 アリの巣 都市を掘る
川 表出 滞留



DZ22019 田中 主税

1. はじめに

現代の都市には、光と音があふれ、人の流れが絶えず、立ち止まることが許されないほどの速度がある。その中に身を置くと、息苦しさをを感じる瞬間が度々訪れる。

しかし、時々、その息苦しきから解き放つような「裏」の気配を、どこからか感じることもある。光の漏れ、音の響き、風の流れ。表とは異なる、もう一つの世界が確かにそこに存在する。私は、その「裏の世界」を表出し、建築として表現する方法を模索していく。

2. 研究背景

2.1 現代都市の特徴

現代の都市は、合理・効率を追求し成長してきた。その結果、街は交通や情報の流れを中心に構築され、人々は常に移動することを求められる。地上では広告や光が連続し、視覚的な速度が空間を支配する。地下に降りても、通路は整然と整理され、歩行の流れが絶えることはない。地上も地下も、「通過するための空間」として設計されていることに気づく。都市はもはや「滞在する場」ではなく、「流れ続けること」を前提としているようである。

2.2 都市への疑問

私は、このとめどない流れの中に、ある感覚を覚えた。それは、立ち止まることが、すなわち、滞留することの難しさである。現代都市では、流れ続ける川のようにあることを求められる。それゆえ、滞留する泉のように、流れを緩め、留まることが難しくなっている。私は、この状況に疑問を呈する。

2.3 都市を掘る

私は、この感覚への応答として、「掘る」という行為に着目する。都市を掘ることは、表層的な速度から距離を取り、静けさを内側へと取り戻す試みである。都市の中にアリの巣のような空間構成を再構築することで、都市に失われた滞留の感覚を取り戻せるのではないだろうか。

3. テーマ

3.1 都市の反転

現代都市は、表層に音と光が集中し、あらゆる物事が流動し続けている。その一方で、沈黙や影、物事の滞留

といった領域は、都市の表面から排除され、見えない裏層へと押し込まれている。

「都市の反転」とは、この関係を逆転させ、裏を表に、陰を光として立ち上げる試みである。それは、既存の都市構造を否定するものではなく、むしろ都市の内部に潜むもう一つの層を掘り出し、可視化する行為である。この反転の行為は、都市の物理的方向性だけでなく、認識の方向性そのものを問い直す。すなわち、「活動する都市」から「眠る都市」への転換である。その中で、人は都市に沈む静けさを再発見することができる。



▲表層の都市と裏層の滞留

3.2 アリの巣

アリの巣は、秩序立った都市構造とは異なり、機能や動線が有機的に絡み合う空間体である。その内部は明確なゾーニングや階層を持たず、通路と空洞が連続的に広がり、環境の変化や群れの行動によって自在に拡張される。この構造は、「流動」と「滞留」が共存し、アリの巣自体が一つの生命体のように機能している。

本計画では、アリの巣のような揺らぎのある構造を、空間の生成原理として取り込む。それは、都市において裏側に押し込まれつつある滞留・孤独・静寂といった要素を表出させる仕組みとして機能する。このアリの巣的

空間は、来訪者が迷いながらも自らのリズムで歩くことを促し、都市の騒がしさから距離をとる「内的な移動」を生み出す。



▲アリの巣の構造

4. 研究目的

この研究の目的は、この「流れの都市」に対して、掘るという行為を通じて、都市の深層に潜むもう一つの空間性を顕在化させることにある。その痕跡として現れる空間、すなわち「アリの巣」のような多層的・迷路的構造は、都市の流動を受け止め、分散させ、静けさへと変換する新たな装置となるだろう。また、「掘る」ことで生まれる立体的な断面構造は、地上と地下を、流動と対流を、裏と表を連続的に結びつける「反転の軸」として機能する。

本研究は、「掘る」という操作を通して、都市の速度と表層性を問い、滞留・孤独・静寂を取り戻すための都市構造の再提案を目的とする。

5. 計画

5.1 対象敷地

対象地として選んだのは、新宿駅の東口周辺、一日の来訪者が、世界有数の交通結節点であり、地上には百貨店や雑居ビルが密集し、地下には商業通路や駅構内、さらには複数の地下鉄路線が錯綜する。そこは、まさに層としての都市が顕著に現れる場所であり、現代都市の縮図とも言える。新宿東口周辺は、常に動き続ける都市である。地上では光も広告も人までもが絶え間ない流れの中にある。一方、地下では、人々は無意識のうちに方向を変え、階段を上り下りし、重層的な動線の中を循環している。これらの空間では「滞留」という概念がほとんど存在せず、人は目的地のために通過し、立ち止まることなく動き続ける。

この敷地における設計の出発点は、その絶え間ない流れを一度断ち切ることにある。掘るという行為を介して、

都市の流れを一時的に緩める「空洞」を作り出す。その空洞は、新宿という都市の見えない層を浮かび上がらせる。



▲新宿

5.2 プログラム

本計画では、都市のヴォイドとしての役割を持たせた音楽ホールを設計する。流れの中にある新宿という都市に、人間が滞留するための受け皿としての建築を、都市の反転装置として提案する。

5.3. 設計手法

私は、「掘る」という行為を単なる構築の手段ではなく、都市を再解釈するための操作として位置付ける。掘削とは、都市の奥底に眠る時間や痕跡をあらわにする行為である。それは同時に、都市の構造を裏返し、内側に隠れていた「静寂」「滞留」「孤独」を可視化する操作でもある。

掘削の痕跡として形成される空間は、アリの巣のように不規則に広がり、複数の空間が連続的に繋がる。この構造は、人の動きを分散させながらも、ところどころに滞留を生み出す。それぞれの空間は、多様な用途を内包しつつ、音や光、素材の変化によって緩やかに性格を変える。そして、この不確定な連鎖が、都市の秩序に対する内的な余白を生み出す。来訪者は都市の構造の外に出るのではなく、その裏側に沈み込む。

6. 参考文献

- 1) 清水裕之：劇場の構図：1985.10.30発行
- 2) 武田大輔：コンサートホールの側壁の傾斜と室内音場の関係：<https://www.env-acoust.t.u-tokyo.ac.jp/public/z/z022.pdf>
- 3) 塩川博義・五十畑武：コンピュータ・シミュレーションを用いたコンサートホールの音響特性に関する研究：https://www.cit.nihon-u.ac.jp/kouendata/No.39/4_kenchiku/4-039.pdf

1. Introduction

ー現代の都市は、私にとって**息苦しい**。光と音が溢れ、人やものは流れ、滞留することを許さないかのような感覚を覚える。

ときどき、その息苦しさから解き放つような**裏**の気配を、どこからか感じる。光の漏れ、音の響き、風の流れ…。表とは異なる、もう一つの世界が確かにそこに存在する。私は、その**裏の世界**を表出し、建築として表現する方法を模索していく。



3. Theme

～都市の反転～

現代都市は、表層に音と光が集中し、あらゆる物事が流動し続けている。その一方で、沈黙や影、物事の滞留といった領域は、都市の表面から排除され、見えない裏層へと押し込まれている。

「都市の反転」とは、この関係を逆転させ、裏を表に、陰を光として立ち上げる試みである。それは、既存の都市構造を否定するものではなく、むしろ都市の内部に潜むもう一つの層を掘り出し、可視化する行為である。この反転の行為は、都市の認識そのものを問い直す。すなわち、「活動する都市」から「**眠る都市**」への転換である。その中で、人は都市に沈む静けさを再発見することができる。



▲表層の都市と裏層の滞留

5. Site

対象地として選んだのは、新宿駅の東口周辺、一日の来訪者が、世界有数の交通結節点であり、地上には百貨店や雑居ビルが**密集**し、地下には商業通路や駅構内、さらには複数の地下鉄路線が錯綜する。そこは、まさに層としての都市が顕著に現れる場所であり、現代都市の縮図とも言える。新宿東口周辺は、常に動き続ける都市である。地上では光も広告も人までもが絶え間ない流れの中にある。一方、地下では、人々は無意識のうちに方向を変え、階段を上り下りし、重層的な動線の中を循環している。これらの空間では「滞留」という概念がほとんど存在せず、人は目的地のために通過し、立ち止まることなく動き続ける。

この敷地における設計の出発点は、その絶え間ない流れを一度断ち切ることにある。掘るという行為を介して、都市の流れを一時的に緩める「**空洞**」を作り出す。その空洞は、新宿という都市の見えない層を浮かび上がらせる。

2. Background

～現代都市の特徴と疑問～

現代の都市は、**合理・効率**を追求し成長してきた。その結果、街は交通や情報の流れを中心に構築され、人々は常に移動することを求められる。地上では広告や光が連続し、視覚的な速度が空間を支配する。地下に降りても、通路は整然と整理され、歩行の流れが絶えることはない。地上も地下も、「**通過するための空間**」として設計されていることに気づく。都市はもはや「滞在する場」ではなく、「流れ続けること」を前提としているようである。

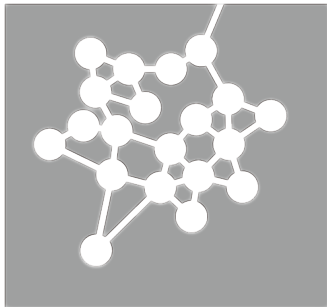
私は、このとめどない流れの中に、ある感覚を覚えた。それは、立ち止まること、すなわち、滞留することの難しさである。現代都市では、流れ続ける川のようにあることを求められる。それゆえ、滞留する泉のように、流れを緩め、留まることが難しくなっている。私は、この状況に疑問を呈する。

私は、この感覚への応答として、「**掘る**」という行為に着目する。都市を掘ることは、表層的な速度から距離を取り、静けさを内側へと取り戻す試みである。都市の中にアリの巣のような空間構成を再構築することで、都市に失われた滞留の感覚を取り戻せるのではないだろうか。

～アリの巣～

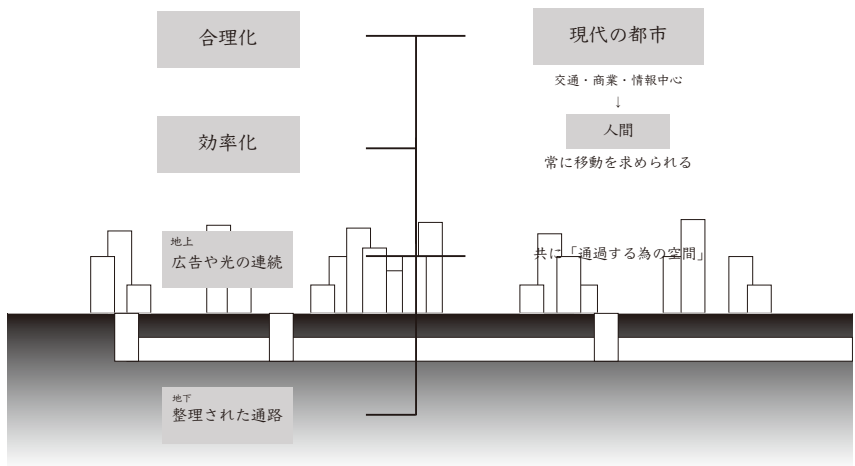
アリの巣は、秩序立った都市構造とは異なり、機能や動線が有機的に絡み合う空間体である。その内部は明確なゾーニングや階層を持たず、通路と空洞が連続的に広がり、環境の変化や群れの行動によって自在に拡張される。この構造は、「流動」と「滞留」が共存し、アリの巣自体が一つの生命体のように機能している。

本計画では、アリの巣のような揺らぎのある構造を、空間の生成原理として取り込む。それは、都市において裏側に押し込まれつつある滞留・孤独・静寂といった要素を表出させる仕組みとして機能する。このアリの巣的空間は、来訪者が迷いながらも自らのリズムで歩くことを促し、都市の騒がしさから距離をとる「**内的な移動**」を生み出す。



▲アリの巣の構造

4. Purpose

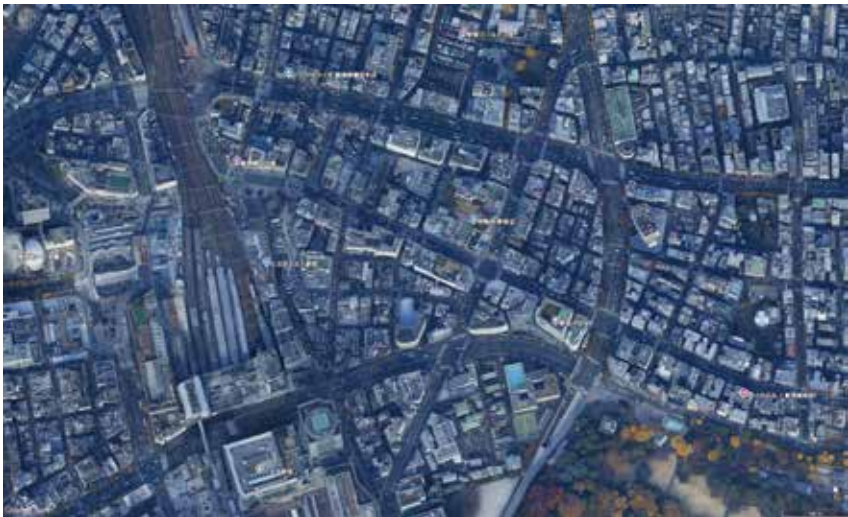


▲現代都市の特徴

この研究の目的は、この「流れの都市」に対して、掘るという行為を通じて、都市の深層に潜むもう一つの空間性を顕在化させることにある。その痕跡として現れる空間、すなわち「アリの巣」のような多層的・迷路的構造は、都市の流動を受け止め、分散させ、静けさへと変換する新たな装置となるだろう。また、「掘る」ことで生まれる立体的な断面構造は、地上と地下を、流動と対流を、裏と表を連続的に結びつける「反転の軸」として機能する。

本研究は、「掘る」という操作を通して、都市の速度と表層性を問い、滞留・孤独・静寂を取り戻すための都市構造の再提案を目的とする。

6. Program



都市のヴォイドとしての音楽ホール

滞留するための受け皿

都市の反転装置